民博共同研究会「ストリートの人類学」
第５回共同研究会（2005 年 10 月 22 日（土）　於国立民族学博物館）
報告題目：「ストリート/コミュニティ/ローカリティー：博多の事例から考える」
スピーカー：竹沢尚一郎

今回の竹沢氏の報告のテーマは、ストリートとは何か、それは歴史的にどのように形成されたのかを、博多の事例から考えるというものであった。その際、氏はストリートをストリートではないもの、つまりストリートの対立概念との関係性において考えるという手法をとる。この報告では、その対立概念の候補として「コミュニティ」がとりあげられた。ストリート／コミュニティ、あるいはフランス語の rue／quartier、日本語の道／町（両側町）という対立を考える際、氏が導き糸とするのはベンヤミンの議論である。氏は要所でベンヤミンを参照しながら、問題の深度を開示していく。

報告の構成は、博多の歴史と概況（2 節）、江戸期の博多の町人組織（3 節）、博多祇園山笠（4 節）、まとめとその後（5 節）というシンプルなものである。報告全体を通して合計 6 つの「道の機能」が提示されている。ここでは、この 6 つの「道の機能」に注意しながら、目次に従って竹沢氏の議論を要約することにする。

１．博多の歴史と概況（2 節）

博多は日本でも最古の都市のひとつで、平清盛の西国経営・対中貿易とともに成立・発展した。かつては環濠都市であったが、現在は福岡市の一部として、およそ 1 km 四方に約 5 万人が住んでいる。1195 年に聖福寺、1243 年に承天寺など、当時対中貿易の拠点であった禅寺が建立され、海港都市として繁栄した。文明年間（1470 年ごろ）には博多の戸数は 1 万戸を超えていたというが、大火で一度焼け落ち、その後 1587 年の「太閤町割」によって、7 大通、7 堂、7 観音という都市の骨格が形成されたという。この「太閤町割」後、後述する「流（ながれ）」という、複数の「町」によって構成されるユニットが成立し、その 7 つの流を基礎として、博多祇園山笠の基礎が形成された。しかし、やがて鎖国と共に、博多は海港都市から藩の商業都市へと、その性格を変え、一部の商人は長崎へと移っていった。江戸末―明治初期の統計によれば、博多の産品のうち、蝋燭、金属類、衣服類、酒、醤油、油の上位 6 品目で全生産高の 81.4%を占めていた（1875 年）。これらはいずれも内国向けの商品であったが、祭のなかで「誇示」されるものであったことに注意したい。

２．江戸期の博多の町人組織：町と流

1690 年当時の博多の戸数は 3.118、人口は 19.468 にのぼった。113 の町が 9 つの流に組織されていた。そのうち、東町流、呉服町流、西町流、土居町流、州崎流、石堂町流、魚町流の 7 つの流は、伝承によると「太閤町割」の際につくられたとされ、祭りの主体となる流である。それに対して、新町流、逗子町流の 2 つの流は新たにできたもので、祭りの主体となることを許されなかった。

博多は東西を川、南を海、北を堀で囲われた環濠都市であり、そこを通る縦 4 本、横 3 本の大通りに沿って、7 つの流が組織されていた。その流を構成するのが町である。町は町年寄を頂点に、それを補佐する数名の年寄り助役、10 戸ごとの組頭、そして屋敷を所有する家持と、寄留（使用人などで人口の約 15%を占めた）とから構成され、橋道路の普請、納税、衛生（井戸、下水）、治安維持、火消し、備荒貯蓄（貧民救済）などを行っていた。

博多では町方支配という支配体制がしかれ、黒田藩の藩庁の下に２名の町奉行（武士）、その下に年行事（12 名）、月行事（流れごとに数名）、町年寄が置かれた。当初、年行事は町奉行が有力な商人の中から任命していたが、1736 年以降輪番制となった。竹沢氏はそこに博多の自治の強まりを指摘する。

ここで竹沢氏が注目するのは、町木戸（柵）の存在である。当初は町ごとに柵があり、それを夜になると閉ざしていた。道の両側に柵が作られ、町の内と外が明示される。竹沢氏は

そこに、町の共同性が明示されていることを指摘し、それを道の機能①とする。
　ところが 1741 年、この町木戸が廃止され、新たに博多の周囲のすべての橋に柵が設けられる。それは、町と町の境がとり払われ、博多と外部との境が作られたということである。さらに、その柵も 1770 年頃に廃止され、博多は外部へと開かれた都市となる。つまり、当初町に埋没していた道が、博多の発展とともに、町を貫くようになったのである。
　では、なぜ町木戸は廃止されたのか？竹沢氏はその答えとして、町外町の存在を挙げる。博多には九つの流に組み込まれていない二つの町があった。その一つの柳町には遊郭があり、もう一つの寺内町には寺院があった。寺内町には僧侶以外に役者達が住んでいた。竹沢氏はこれらの町を、性、飲食、華美、変身、変容に関わる非日常の場とし、博多の内部にある外部、すなわち町外町としてとらえる。氏はベンヤミンの議論を手がかりに、ここに人間の生の非日常的な内部が、外部の町として表現されているとみる。そして、木戸をはずすということは、ストリートを通じて、この町外町、内部の外部（内部を表現する外部）へとつながることを意味していたという。これが道の機能の②である。
　最後に氏は町がある種の「生活共同体」として機能する一方で、複層的な階層関係・支配関係の中にあることを指摘し、共同性を作り出す一方で、階層・支配を明示するものとして、次節でとりあげる「祭」を挙げる。これが道の機能③である。竹沢氏はベンヤミンの試みを、内部を理解する手がかりを外部に求める試みとしてとらえ、ベンヤミンがある種の外部として、パサージュやモードや広告、建築物を取りあげるのに対して、氏はストリートにおける祭という現象を取りあげるようとする。

３．ヘゲモニー装置としての祇園山笠
　博多祇園山笠とは博多総鎮守の櫛田神社の夏祭り（旧暦 6 月 1 日~15 日）で、1452 年がその初出であるという記録がある。高さ 15 メートルの飾り山が毎年奉納され、市中 5 キロメートルを舁き歩く。ところが、1730 年から 1740 年代にかけて、「追い山」が開始される。追い山とは 5 分おきに出る山が先の山に追いつこうとするものである。これによって、山をかつぐ者が交代するようになり、近隣の町村に応援を頼むようになった。ここで竹沢氏が注目するのは、この追い山の開始にともなう祭の盛大化が、先にみた 1736 年の年行事の輪番制にともなう自治の強化や、博多の発展にともなう 1741 年の町木戸の撤廃とほぼ同時期であるということである。氏はここで、祭とは都市のレベルでの共同性明示の場であり、西洋における広場に代わるものではないかと主張する（Cf.道の機能①・②）。ただし、西洋の場合、パブリックな広場とプライベートな家とが空間的に並置される、日本の場合、パブリックとプライベートとが時間的に並置されているという。
　祭の組織は 7 つの流の輪番制で、流れに一つの当番町がある。町には、若者組 - 中年組み - 年寄り組みの年齢階梯制があり、祭の際には、中年組から「赤手拭」（のちに「取締」も）が、年寄り組から「総代」が出され、町を指揮した。ここから祭の人生儀礼としての側面がみえてくる。子供は山の前を走る「先走り」を、若者は実働を、中年は「赤手拭」、「取締」など指揮を、年寄りは「総代」など管理を行った。そして死亡すると追善山がその人の家の前に出され、歌が歌われる。このように、男性は祭の中で誕生から死までをおくり、そこにはある種の理想化された人生モデルが提示されていた。これが道の機能④である。
　次に、祭りの盛大化にともないあらわれた、加勢町、加勢村の存在が指摘される。加勢町は博多の中で祭の担い手でない流、町からなり、加勢村は博多の周辺の村からなる。また、「博多ウツシ」と呼ばれ、博多祇園山笠を模した山笠の祭が、黒田藩を越えて、壱岐や日田（豊後）、浜崎（肥前）にまで確認される。これは博多の商圏（経済的ヘゲモニー）を意味する。博多の道は北部九州全体へとつながり、外部へ開かれたものであった（Cf.道の機能③）。
　以上のように、生活の共同（道の機能①）と外部へのつながり（道の機能②）、町を包み込み貫徹する、複層的な支配・階層関係（道の機能③）が存在する場合、町、流、博多の各次元で異なる共同性が存在することになる。このとき、どのレベルで「コミュニティ」とい

うかが問題となる。竹沢氏は、この概念が分析概念として、はたして使い物になる概念なのか疑問符を付す。それに対して、日常生活の共同性は町のレベルで閉じているが、都市の共同性は外部へ開かれているという、今回の博多の事例から言えるのは、次のことではないかという。すなわち、祭はがんらいの共同性（＝過去）――かつて人間の生活、人類の歴史のどこかで存在していた、そしてなおかつ今でも引きずっているような共同性――を都市の中に一時的に再建するための装置として考えることができる。そして、そうすると祭の道は現在（都市の支配）を過去にありえた共同性へとつなげる回路なのかもしれない。これが道の機能⑤である。ここで竹沢氏のいう「がんらいの共同性」とは、氏の引用するベンヤミンがパサージュのうちに追跡する「集団」（＝内部）のようなものである。そして、その集団の夢の形象（＝外部）がおそらく、ここでいう祭なのだろう。

４．まとめとその後の変容

竹沢氏はこの報告を、次のようにまとめている。都市の道、ストリートはがんらい地元住民のものであった。江戸期を通じて、道は各町によって管理・維持され、道を含んだ町がある種の「生活共同体」として機能していた（道の機能①）。のちに、博多の発展とともに、生活の共同の基盤が町から博多へと移る傾向が見られるようになった（道の機能②・③）。ベンヤミン的問題意識からすれば、道で行われる祭というある種の外部が、それに参加する人間の内部をどう映し出しているのかを見る必要がある。今回の報告では、それが「道の機能」として取り上げられた。

そして最後に、道という外部の変容が人々の内部の変容をどう映していたのかを見るために、明治期の変容が取り上げられた。氏が指摘するのは、明治期以降の行政権力による身体の管理である。インフラ整備とともに祭と権力の葛藤が繰り返される。それまで住民が管理していた道を行政が主体となって管理するようになる。ここにはフーコーが言う近代の装置が人間の内面を変えていくようになるという問題がある。1872 年には大量の消費を行い、風紀を乱す「野蛮な風習」として、祭は一時禁止される（1884 年まで）。1897 年には電線の設置のために禁止が市会で議決されるが、山を低くし、法被を着用することで許可を得る。1910 年には市内電車の架線を切るという理由で、市長が廃止の方針を示す。しかし、この時代に国家神道体制が確立し、民衆の祭を抑圧するというよりは、それを取り込んでいく政策が採られていく。

最後に、竹沢氏は、軍隊と祭の類似性を指摘する。両者の共通点として、集団行動の体得、社会階層の明示、身体技法と美的情操の育成、対立がもたらす高揚などが挙げられる。実際、山笠のテーマが軍人を飾るなど、軍隊をあらわすものになっていく。つまり、地域の共同性がそのまま国家の「共同性」の幻想に吸収されていくのである。竹沢氏は、道の機能の⑥として、このような生活の共同を、国家の共同の幻想へとつなげていく回路としての道を挙げている。そして、以上に見てきたように道、ストリートには色々な機能があり、それらが複雑に重なり合いながら、生活の中に入り込んでいることが指摘され、報告は締めくくられた。以下質疑応答の一部を要約しておく。

＜質疑応答＞

関根：われわれは地図を見るとき、道が印象的なので、まず貫かれている道を見てしまう。しかし、今回の話を聞いていると、まず両側町というものが空間的にあって、それが木戸で閉じていて、その町が連なっていると見ないといけないという気がした。

竹沢：はい。ただ、この道は豊臣秀吉がいわゆる太閤町割に際してつくっている。それを町人があとから再占有していったと言う方が実情に近いのかもしれない。

松本：秀吉以前からこの骨格はあったのか？他から商人を連れてきたりしなかったのか？

竹沢：骨格はあった。秀吉の町割以前に大火があり、一度燃えている。それ以前はもっと人口が多かったという。逃げていった商人をもう一度集めた。

関根：地図を見るとタテの流のほうが強いようにみえるが？

竹沢：経済的にはヨコの方が強い。タテは外へつながらない。ヨコは橋があり、外へとつながる。外から来る人はヨコを通って商店へ行く。ヨコの中でも、当初は上の魚町、次に石堂町、さらに下の海側が強くなっていく。

松本：それは近世の中での移り変わりか？

竹沢：はい。

松本：私はタテからヨコという、そのタテのつながりの方が気になる。それは、近世よりもっと古いものではないか？　秀吉以前の。黒田藩の中心地という意味合いのほかに、港を通してタテ筋にはもっと別のプリンシプルが働いているような気がする。

竹沢：そうかもしれない。もとは海港都市だから。鎖国以前はもっと海まで伸びていたかもしれない。

鈴木：自治の獲得、木戸の廃止、追い山にともなう祭の盛大化が、ほぼ同時期ということだが、それはどういうことか？

竹沢：ある種、町人が力をつけて、博多全体で物事を運営するようになったということ、そういうアイデンティティが確立したということではないか。

関根：町人という言葉で呼ぶが、その中身をもっと正確に考えないと、議論がどっちにも転ぶ。自治的というと何か閉じた感じがする。資本主義的な商業がそういうものをぶちこわしていく。パリだとパサージュがデパートになる。パサージュになるのも商人、デパートになるのも商人である。最近パサージュはわりと元気。木戸は閉めるが、現在の資本主義のあり方の中で、新たな場所を作り出している。商人という言葉だけでは大ざっぱではないか？

竹沢：町人と言わなければならない。町人とはアンビバレントなもの。一方で外部から来てもらわなければ商品を売れない。商圏を大きくしたい。他方で、自分たちの生活の基盤が不安定では困る。だから昔、町は閉じていた。それがある程度力をつけると開いていく。これが私の見取り図。開かれつつ閉じようとする動きと、それを開いていこうとする動きが最初から両方ある。

内藤：道と祭はどういう関係にあるのか？

竹沢：道がなければ祭りはできない。祭というのはある種の外部。外部がそれに参加する当事者達に戻ってくるというところがある。人生のモデルを提示するとか。ある種の共同性を作り出すとか。

内藤：それと最初提起されているストリート／コミュニティはどう関わるのか？

竹沢：最初は木戸があって、そのなかに町がある。これはコミュニティと言える。それがだんだん共同の基準、単位が大きくなっていく。生活の共同は町のレベルで営まれるが、商売の共同は博多全体で実現される。そして祭とは、博多の富や権力を外部へと誇示する装置である。そうしたときコミュニティという言葉は、どのレベルで使えるのか？　もしいうとなると、開かれたコミュニティということになり、分析概念ではなくなってしまう。初期には町はある種の濃密な内部であり、ストリートをなかに取り込んでいた。しかし、それが都市に向かって、あるいは都市を越えるものに向かって開かれていったとき、ストリートは町のものではなくなっていく。ある種の共同性を引きずりながら、外部に向かって開かれたもの、それをなんと呼ぶか？

関根：しかし、コミュニティという言葉ははずしたとしても、道の機能①のところの、木戸による共同性というのが何なのかちゃんと考えないといけない。最初町の共同性があったのが、木戸が開くことによって、だんだん開いていく、というように話が単純化して聞こえるところがある。そうすると、そもそも共同性ありきか？　ということになる。もし、そういう反発があったらどうする？

竹沢：しかし、やはりある種の生活の基盤になっていることは間違いない。道路をつくる、橋を作る、納税するなど。それはずっとある。それを明示していたのが両側の木戸だということ。ただ、共同性という言葉を使うかどうかは問題がある。内部にはもちろ

ん対立や格差を含む共同性だ。

質問：道の機能⑤のところで「がんらいの共同」という言葉があるが、これは博多のコンテクストで言ったらどういうことか？

竹沢：ちょっとはみだしている。ここでは人間の共同について述べている。

質問：木戸で閉じられた町にあった共同性のことではないのか？

竹沢：ここではちがう。博多のコンテクストで言うならむしろ祭が始まったときの共同ではないか。しかし、ここではそれ以上のことを言おうとしている。何で祭が行われるようになったのか？　何で人間がそれを行ってきたのか？　ということまで言おうとしている。だから、コミュニティなんてあまり言わない方が良い。

文責：西垣有（大阪大学大学院博士後期課程）